

Title	近世イングランドにおける教会と社会 : メアリとエリザベスの時代
Author(s)	指, 昭博
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49442
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【57】

氏名	指 昭 博
博士の専攻分野の名称	博士（文 学）
学位記番号	第 22406 号
学位授与年月日	平成20年8月4日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	近世イングランドにおける教会と社会—メアリとエリザベスの時代—
論文審査委員	(主査) 教授 江川 温 (副査) 教授 秋田 茂 教授 藤川 隆男

論 文 内 容 の 要 旨

イギリス宗教改革は、イギリス近代史の原点として位置づけられながら、いくつもの評価困難な問題を抱えている。しかし伝統的な理解では、プロテスタンティズムへの移行は中世末期からの底流を持ち、ヘンリー八世によって公然と開始され、エドワード六世によって継承され、あだ花的なメアリのカトリック回帰を挟んで、エリザベスの即位によって完成されるとされてきた。これに対して1970年代後半から「修正主義」の流れが生じ、イギリスの教会と一般信徒はメアリ時代まで基本的にカトリック的であり、ただ国王への服従という原則に従って宗教改革を受け入れたに過ぎない、プロテスタンティズムへの移行は、エリザベスの治世移行に始めてゆっくりと生じてくると主張した。このような見方は今日では広く共有されている。

著者は基本的には修正主義の立場に近いが、この立場の論者たちが必ずしもテュー

ダー中期の史実を実証的に踏まえていないと指摘し、伝統的な見方の根拠もそれなりに認めつつ、メアリ時代からエリザベス時代初期の教会史について、全体的な見取り図を作ることをこの論文の目的とする。そして特に、A・G・ディケンズによって創始された、「下からの」つまり教区現実からの教会史という視角に力点を置いている。なお本文は400字詰め原稿用紙に直しておおよそ800枚という規模である。

第I部はメアリ時代の統治の基本的性格や宗教政策を扱う「上からの」教会史である。第1章ではメアリの統治をイングランド最初の女性君主という見地から考察する。第2章ではメアリとスペイン王太子フェリペとの結婚への反対を旗印としたトマス・ワイアットの反乱を分析し、プロテスタントも国王への反乱には消極的であったとする。第3章ではメアリ時代の出版利用と出版統制を検討し、それがプロテスタントと比べて特に時代に立ち後れたものではなかったと主張する。第4章ではメアリ時代の教会巡察事項や人文主義者レジナルド・プールの教会改革論を分析して、この治世のカトリック的教会改革への指向を明らかにする。

第II部は、教区の現実を扱う「下からの」教会史であり、メアリ政権の教会改革を困難とした現実の社会状況を明らかにする。第5章では、有力者による教会財産略奪でエドワード時代の教区教会が相当に荒廃していたこと、また俗人には宗教問題から距離をおく姿勢が見られたことが明らかにされる。第6章は妻帯聖職者の問題で、プロテスタント化の時代に妻帯した聖職者たちのメアリ時代における動向を検討し、この問題で聖職者の威信が相当に傷ついていたことを指摘する。第7章では、聖職者の人材供給の問題をテューダー中期全体にわたって考察し、エドワード、メアリ時代に良質な聖職者が非常に不足していたこと、エリザベス時代になってプロテスタントが安定するとともに、プロフェッションとしての聖職者が確立し、安定供給が実現することを示す。こうしてメアリ政権はその教会改革の意気込みにも拘わらず、施設、人材で大きく制約され、治世の短さもあって十分な成果を挙げられなかったとする。

第III部は宗教改革の文化的社会的影響力に係わる3つのトピックをとりあげ、その意義と位置づけを考察する。第8章は改革された教会がウェールズ語の使用を柔軟に認めたために、ウェールズとイングランドの統合が促進されたことを明らかにする。第9章はヨークにおける聖史劇の上演の途絶の問題を扱い、地元民にとって宗教劇上演はカトリック信仰の表現というより祝祭を通じての民衆文化の表現としての意味を持っていたのであるが、改革教会の圧力とエリート層の離反によって途絶したとする。第10章は、フォックスの『殉教者の書』をとりあげ、16世紀にこの書を持った影響力は小さいこと、むしろ17、18世紀の過程で影響力が増大し、「プロテスタント国家イギリス」の自己意識や「血まみれメアリ」の伝説が形成されていくことを述べる。終章は「歴史に刻まれた光と影」と題して、それぞれの論点の意味を再確認している。

論文審査の結果の要旨

イギリス宗教改革史では現在代表的な研究者である著者は、研究動向の大局を踏まえて、メアリ時代をどのように把握するかが、宗教改革の全体像を決定すると主張す

る。まことにユニークな発想であるが、本論文は、全体として著者のこの主張を十分に支える内容を備えている。メアリ時代には、トリエント公会議を先取りするようなカトリック改革が立案されていたが、教区教会の状況はその実現を阻んだ。それでも反メアリの掲げるプロテスタント勢力は少数であった。もしメアリの治世が持続したならば、イングランドは長期的にカトリック国になっていたであろうという著者の指摘は十分に頷けるものである。

そのようなスケールを備えた論文でありながら、随所に細部の観察と緻密な考察が見られることも、大きな長所といえよう。教会の変動の中での聖職者たちの帰趨を簡単に解釈するのではなく、彼らの精神状態を細やかに思いやっている。また『殉教者の書』については各時代の版を実に緻密に観察し、刊行の実態について鋭い分析を行っているが、これは著者の書物好きが研究に生きている例である。

しかし欠点もなくはない。大きな構想からいえば、エドワード時代の考察が欠落していることである。著者はメアリ時代がエリザベス時代の陰画として否定的のみ見られてきたと批判するが、著者の論文ではエドワード時代がメアリ時代の陰画になっているという印象を受ける。また第三部の各論文の位置づけは、やや不明確である。とりわけイングランドへのウェールズの統合における宗教改革の果たした役割を肯定的にとらえる論旨は、論文全体とそぐわないように思われる。

しかし、著者の達成した研究の意義は、このような欠点を補ってあまりあるといえるだろう。本論文は幅広い合意に基づく宗教改革という像を歴史的構築物として解体し、信仰と生活の間で逡巡する16世紀イングランドの人々のリアルな姿を明らかにした業績である。よって本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。